

スーパーロボット大戦 Access Universe

名無しのピエロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

創作スパロボです。初めての試みです故温かく見守っていただけたら幸いです。

一部、原作にはない設定や、キャラクターを用いた展開がございますがご了承ください。

機動戦士ガンダムシリーズが非常に多いのはシリーズの恒例ということで見逃していただければ幸いです。スーパードール、リアルをそれなりに織り交ぜつつロボットでは無さそうな作品もありますがそこもどうかご容赦ください。

なるべく一つの世界にしたかったのですがやりたい絡みを考えるとどうしても未来現在過去平行世界といった設定が出てきてしまう事になりました。

描写は戦闘よりもシナリオに振っています。というか戦闘の描写は本当に酷いです、それでも見守ろうという方はお付き合いいただけましたら幸いです。

↳参戦作品↳

- 機動戦士Zガンダム
- 機動戦士ガンダムZΖ
- 機動戦士ガンダム逆襲のシャア
- 機動戦士ガンダムUC
- 機動戦士Vガンダム
- 機動新世紀ガンダムX
- 機動戦士ガンダム00
- ガンダム Gのレコンギスタ
- マジンガーZ INFINITY
- 真(チェンジ!) ゲッターロボ 世界最後の日
- UFOロボグレンダイザー
- 鋼鉄神ジグ
- 蒼穹のファフナーシリーズ

- 地球防衛企業ダイ・ガード
- 勇者特急マイトガイン
- 絶対無敵ライジンオー
- OVERMAN キングゲイナー
- フルメタル・パニック!シリーズ
- 装甲騎兵ボトムズシリーズ

ゝ新規参戦作品ゝ

- ☆機動戦士ガンダム00 V (機体のみ)
- ☆機動戦士ガンダム00 V戦記 (機体のみ)
- ☆勇者警察ジェイテッカー
- ☆鉄人28号 (2004年版)
- ☆BEATLES

目次

プロローグ	1
第1話　く繋がりの日	5
第2話　く邂逅	23

プロローグ

——時は宇宙西暦??年、人々の暮らしは宇宙へと進出した。

地球連邦からの独立と共に、地球に巢食う脅威から逃げる為、また分かり合えない人類達の独立の為に人類は宇宙へと生活の地を広げた。

スペースコロニーと呼ばれる宇宙空間の建造物に移住した人々はスペースノイド、地球に住む人類はアースノイドと呼ばれ、やがて地球と宇宙の間に軋轢が生まれ戦争が始まる。

それと共に、地球を支配せんと企む悪の科学者、Dr. ヘル率いる機械獣軍団も侵攻を開始。地球連邦軍がジオン軍のモビルスーツに対抗する為に研究開発していたV作戦とは別に、地球の光子力研究所では機械獣と戦う為のスーパーロボットが開発された。

——またしばらくして、地球連邦軍とジオン軍の戦い、一年戦争は地球連邦軍の勝利で集結し、地上で侵略活動を行っていたD r. ヘルの軍勢も、人類の活躍により壊滅した。

一年戦争と呼ばれる、アースノイド達の地球連邦軍と、スペースノイド達のジオン公国軍との戦いは地球連邦軍の勝利に終わる。

D r. ヘル率いる機械獣軍団は人類に宣戦布告、連邦ジオンを問わずに攻撃を仕掛けたが、連邦とジオンは終戦協定を結ぶまで、D r. ヘルに対して共闘する事は殆ど無かった。

——そしてもう一つ……インベーターと呼称される地球外生命体もまた、地球を脅かしていた。

これらと本腰を入れて向かい合ったのは一年戦争集結後の月面戦争であり、その際には多大な犠牲を払いながらも人類は数多くの人型機動兵器のパイロットの活躍で勝利を収めた。

後にジオンの残党の反乱や、連邦政府の腐敗が生んだ戦いであるグリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争…人類同士の戦いは絶えず続き、ベガ星雲の使者達、フェストウムやヘテロダインといった人類を脅かす存在も次々と現れた。

こうした脅威に晒されながらも人類は進化していた。一年戦争や月面戦争から10年以上が経過した今では、それなりに世界も平和になり、ペットロボット程度にしか使えなかった人工知能技術が発達し、h I Eと呼ばれる人間型のロボットが開発され、人々の暮らしを支えている。

人類同士の争い、人ならざる者との戦い、宇宙空との戦い……様々な戦乱を乗り越えて人類は進化していった。一年戦争から10年以上が経過し……未だ小競り合いはあれどしばらくの安寧を取り戻した世界には再び暗雲が立ち込めていた。

そんな中……2人の少年少女が世界の希望の為に歩み始めた。

これは——世界を紡ぐ、
鋼の戦神達の物語

第1話　く繋がりの日く

—東京—

人の喧騒、車の排気音、そして慌ただしい電子音が鳴り響く街を5人の若者が歩いていた。

タクヤ「…しっかしよお、この街の技術は凄いやなあ、バナージ。」

バナージ「え？ああ……そうだね。」

ミコツト「バナージ……やっぱりまだ苦しいの？」

バナージ「いや……大丈夫。多分。」

ジュード「……気分転換と後学の為に地球に降りたけどさあ。やっぱりバナージ……宇宙……オードリーの側にいた方が良かったんじゃないか？」

カミーユ「無理を言うな、ジュード。バナージもバナージなりに乗り越えようとしてる。今は気を紛らわして楽しませてやりたい」

ファ「バナージだけじゃないわ、オードリー達もよ」

バナージという少年を気にかける少女の名はミコット、その横で辺りを見渡して感心しているのがタクヤだ。

そして、彼等の後ろで話をしているのは、この宇宙西曆史に残る戦争―グリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争でガンダムを駆り戦ったパイロット、カミーユ・ビダンとジュード・アーシタ、ファ・ユイリイ、ルー・ルカだ。

バナージもまた、ガンダムを駆り死線を潜り抜けた戦士である。この世界で数月前に繰り広げられた、ラプラス騒乱の功労者だ。

ラプラスの箱と呼ばれる物を巡る、連邦軍とネオ・ジオンの部隊との戦いは熾烈を極め、地球、宇宙共に多大な被害を出しながらも終結し、ラプラスの箱の開示、そして新たな指導者の登場により世界は再び平和を取り戻しつつあった。

成り行きで戦う事になってしまったバナージをカミーユ達は同じガンダムのパイロットとして支えてはいたが、やはり精神的な負担は多く抱え込んでいた様だ。

バナージはその戦いで、人の体にはあまりにも大き過ぎる負担が掛かった為にしばらく安静に療養していたのだが……

タクヤ「なあ、バナージ。折角オットー艦長やブライト大佐が地球に降りる許可をくれたんだぜ、もう少し楽しまないか？」

バナージ「ごめん」

ミコツト「もう、タクヤ！バナージがどれだけ辛いかあなた…」

タクヤ「わ、分かってるって…！悪かったよ…」

ルー「はいはいは駄目よ皆、誰かを責めるような事言わないの」

カミーユ「…そうだ皆、たい焼きでも食べないか？俺が出すよ」

カミーユが指差す方向には横断歩道の先の角には笑顔で振る舞う店員のいるたい焼き屋があり…タクヤとジウドーはそれを見て顔を輝かせる。

タクヤ「おおっ！たい焼き！いいですね、カミーユさん！」

ジウドー「やрийい！カミーユさんのオゴリだ！」

ミコツト「いいんですか？」

カミーユ「構わないさ、俺も軍人の端くれだからな。」

ルー「ふう…カミーユの後輩達に甘いクセ、どこかで直さないと…」

バナージ「……………あ、あれ。」

ファ「バナージ?……………ああ、なるほどね。」

そうして横断歩道を渡ろうとすると、バナージ達の反対側から来る老婆とそれを側で補助している女性に気付いた面々が声を掛ける。

バナージとファが駆け寄ったのは単純に老婆達の歩みが遅くて不安だ、というだけではなく、横断歩道を通ろうとする車の進行の妨げにもなっていたからだ。

「おい、アラト!」

「あの子、人間じゃないですよ!」

「分かってるー!!」

……………バナージ達が老婆達に寄るとほぼ同じく、一人の少年が駆け寄ってくる。

アラト「あつ…手伝います!」

バナージ「あ…どうも…」

ファ「すみません、ちよつと失礼しますね?」

女性？「ありがとうございます」

3人の手伝いもあって彼女達は無事渡る事が出来た。バナージ達は老婆と女性に会釈をすれば反対側で再び横断歩道の信号が変わるのを待つ。

カミーユ「……なあ、君達」

遼「ああ……はい」

ジュード「あいつの知り合い、というか……学校の友達つてところ？あ、俺はジュードつて言うんだ」

ケンゴ「ええ、そうですよ。僕は村主（すぐり）ケンゴです。……何か用ですか？」

カミーユに声を掛けられて返事をしたのは海内遼、その隣にいる眼鏡の少年は村主ケンゴと名乗った。

カミーユ「さつき、お婆さん……もしくは彼女を手伝っていた女性が人間じゃないと言っていたが……」

遼「あんた達、もしかしてスペースノイドか？」

ケンゴ「スペースノイドだったら仕方ないですね、宇宙ではまだ…」

タクヤ「hIEですよね!!」

ケンゴ「うわあっ!?!」

突然脇から大きな声を上げるタクヤに思わず声を上げるケンゴ。

ジュード「hIE……ええと、聞いた事あるような…」

カミーユ「ヒューマン・インターフェース・エレメント…の略称だった筈だ。確か非常に人間に近い高性能AIを搭載した人間型のロボット、だったか?」

hIEとは、この街とその周辺都市で研究開発が進められ、現在特定地域での使用がされている、サーバー上にあるコンピュータにより制御されている人型ロボットの事だ。

一見すると人間と遜色無い為に親しみやすさがあり、人間のこなす仕事も難なく出来るために警備、広報、商業、果てには政治やモデルなど、様々な仕事用のhIEも開発されている。

遼「まあ、おおよそ合ってるが…厳密にはAIを搭載してる訳じゃない。あれはどてかい超高度AIによって制御されてるんだ」

ケンゴ「ええ、これがまた完璧なまでに人間に近付けてますからね……厄介な機械ですよ」

h I Eの事を解説する遼、少々批判的な意見を述べるケンゴ。

ルー「この街ではそのh I Eの技術が使われているじゃない。私達はその見学に来たのよ」

ミコツト「私達、こういう者なんです」

ミコツトが見せたのはアナハイム・エレクトロニクス工業専門学校の学生証だ。それを見せると遼達は少々興味が湧いたようで。

遼「なるほど、だからわざわざこんな所に来てるのか。…アナハイムといえば、電子部品や家庭用電気用品から軍事産業まで担っている大手中の大手だからな…h I Eの技術は吸収しておきたいのか。」

ジウドー「いやいや、そう言うんじゃないって、俺らは…」
ケンゴ「時期的にはそちらも学校がある筈では…?」

訝しげな表情でカミーユ達を見る遼とケンゴに対して、カミーユが前に出て説明する。そもそもカミーユやジウドーはアナハイム工専の生徒ではないのだが。

カミーユ「いや、俺達は少し事情があるんだ。すまないがその辺りはあまり話せない。」

カミーユ「……まあハツキリ言つて観光みたいなものさ、正式にh I Eの生産工場を見るとか、技術者と話をするなんてする訳じゃあない。」

遼「そうか……」

ケンゴ「でも物好きですね、h I Eなんかの見学に来るなんて」

ミコツト「そうですか…?」

特にバツが悪そうにh I Eの名を口にするケンゴに首を傾げるミコツト達の後方からバナージ達が合流する。

バナージ「すみません、カミーユさん。何だか放っておけなくて……カミーユ「気にするな、お前は信じる道を行けばいいんだから。」

遼「アラト、わざわざHIEの手助けなんてする必要はないんだぞ。」

ケンゴ「そうですよ、アレは、ああいう事をするためにプログラムされてるんですから。安全も保証されてますし。」

アラト「うん……それは分かってるんだけど、なんだかね。」

如何にもお人好しですといった風貌をしている少年の名は遠藤アラト、バナージ達も含めてお互い自己紹介をすれば……

アラト「そうだ……!良かったら、僕達が案内するよ。」

遼「おい、アラト。」

ケンゴ「これから約束があるの忘れてるんですか?」

アラト「あ……」

約束、と聞くとアラトは渋々と肩をすくめて

ルー「いいのいいの、気にしないで。こっちはこっちでこの街を楽しませてもらうから。」

タクヤ「そうそう！また機会があれば頼むよ！」

アラト「う、うん！」

その会話をする脇で、カミーユとバナージはたい焼き屋の店員を見ていた。

カミーユ「：彼女もh I Eなんだろうな。」

バナージ「えっ？分かるんですか？」

店番をしている女性をh I Eだと判断するカミーユを見てバナージは目を丸くする。それもそうだ、端から見れば彼女は笑顔がトレードマークの看板娘程度にしか思わないだろう。

だが、この街は違う。そうした仕事の何割かをh I Eに委ねている。

カミーユ「店の目の前で若者がたむろしてくつちやべってたら、大なり小なり嫌がるだろうさ。でも彼女はそんな反応はしないどころか、ずっと笑顔を保って、呼び込みを

している。」

バナージ「…たい焼きを売る事、それをプログラミングされているからですか？」

カミーユ「ああ、仮に彼女が一般人を怒鳴りつけたりでもしたら…店どころかh I Eの信頼も落ちるだろう。…そもそもh I E自体に賛否両論な所がある様だしな。」

バナージ「…」

決められた行動をするのはA Iを搭載したロボットならば当然の事だ。だがバナージは彼女の姿を見て複雑な感情を抱いていた。

バナージ「…彼等に感情はあるんでしょうか。」

カミーユ「俺もh I Eに詳しい訳じゃないが…どうも中には特別なh I Eがいるらしい。」

バナージ「特別？」

ジユドー「カミミミユミさん！」

どうやらアラト達との別れを済ませたらしいジユドー達がたい焼き屋の前に改めて集まる。

カミーユ「と…：そうだったな。皆にたい焼きをご馳走しないと。バナージ、宇宙でも言ったが…お前は今は心を大事にしろ。壊れてしまわない様に…な。」

バナージ「——はい。」

そのやり取りの後、少々深刻そうな表情をしたルーが現れて。

ルー「…：カミーユ、ちょっと良いかしら。」

カミーユ「どうした？」

ルー「どうやらこの付近に…：モビルスーツやASを所有するテロ組織が潜伏してらしいわ。」

ルー「それに…：どうやら今日、その部隊を動かすかもしれないって…」

それを聞いたバナージは先程までの会話を思い出し。

バナージ「もしかして、h I Eを快く思っていない人達が…」

カミーユ「ああ、もしくは純粋に闘争を求める者たちか…だ。」

ルー「ブライト艦長が至急リ・ガズイとメタスを降下させると言っているけれど…」
カミーユ「いや、俺達の出る幕は無いと思う。」

カミーユ達も連邦軍の端くれ、連邦軍に連絡を取り対処してもらう事は可能だろうがこの近辺の連邦軍の基地は少々離れた所にある。

それに、わざわざロンド・ベルに通達が来る事を考えるとこれはあまり軍に口外しない方が良いのだろうとカミーユは結論づけ…

タクヤ「いやいやいや…カミーユさん！折角モビルスーツを降ろしてもらえるんだから戦いましょうよ！この街を放っておくんですか!？」

カミーユ「いや、そうじゃない。どの道今から降ろしても間に合わないだろう、それに…」

カミーユがまるで知っているかのように説明しようとすれば、途端に街から悲鳴が聞こえ…

『キヤアアアアアアア…!!!』

ジユドー「!カミーユさん、これって…!」

カミーユ「…始まったか…!」

バナージ「う…!? あれって…!」

カミーユ達が見る方向では、何も無い所から突然姿を現すA SとM Sの姿が…

一方同時刻、バナージ達と別れ、学校からの帰路に着いたアラト達は…

遼「アラト、さつきも言おうとしたが…お前はお人好し過ぎだ。今時あんなにh I Eを氣遣う物好きはお前ぐらいだぞ」

アラト「いや、でもバナージ達も…」

ケンゴ「彼等はアナハイム工専の学生だそうですね。というか、外から来てた感じ丸出しだったじゃないですか。」

h I Eの手助けをしたアラトの軽率な行動を咎める2人。この街ではh I Eは共に

生活する仲間、パートナーとして見ている者もいれば、反面HIEを道具としか見ていない者もいる。

むしろ後者の方が印象は強いだろう。所詮はロボットと侮る人間や、人間の仕事を奪っていく恐ろしいロボットとも評されているのだから。

アラト「えっ?!アナハイムって……あの?」

遼「そうだ、月を拠点にしてるあのアナハイムだ。」

アラト「……もしかして彼等ってモビルスーツのパイロットだったり?」

ケンゴ「遠藤は夢見過ぎですよ……あのカミーユって人はともかく、他の人達はモビルスーツなんて乗る顔じゃないでしょう。」

アラト「な、なんだよ。いいじゃないか少しは夢見たって。あのマジンガーZだって、俺達ぐらいの歳の子が操縦してたんだろ?」

遼「兜甲児の事か……お前はヒーローという像が好きだな。」

アラト「遼までそう言うかあ……」

遼「……?おい、なんだ、あれ……」

項垂れるアラトの横で、遼は街の異変に気が付く。不自然に一方向へと向かって行く

住民達を見て、ケンゴはため息を吐く。

ケンゴ「どうせまたh I Eのプロモーションイベントとかじゃないんですか？」

アラト「でもあれ…何かから逃げてるんじゃないや…？」

遼「とにかく、ヤバい。急いで離れるぞ！」

そうした会話をする3人に、謎の声が聞こえて来て

『——いいえ、違う。……………繋がるのよ、宇宙が——今日と言う日に。』

その言葉の後、アラト達の視界にも、MS…旧式のハイザックが現れて…アラト達が「うわあああああああ…!!」と悲鳴を上げたその時——

——眩い粒子の光が通り過ぎ、ハイザックの頭部を破壊した。

頭部を破壊されたハイザックに追撃のビームが2発足に打ち込まれ、軽い爆発を起こ

しながら機体が倒れて…

アラト達はその光景を目にし絶句する。まさか自分達がこの様な戦いを見る事になるとは思いもなかった。遼の指示で駆け出す彼等を見送る2機のモビルスーツはパイロット同士で会話して…

「まあ悪くない精度だろ？俺も捨てたもんじゃないだろう。」

「ああ、問題無い。行くぞ、掃討する！」

「へいへい、ちったあ褒めてくれると嬉しいんだがねえ！」

街に突如として現れたテロ組織の部隊と交戦を開始する2機のモビルスーツ、片方は青いボディに2基の粒子エンジンを搭載しており、2本の剣をその手に持ち……もう片方は大型のスナイパーライフルを所持した緑のモビルスーツで。

そのどちらも、この世界で「ガンダム」と呼ばれる風貌をしており―

ロックオン「ロックオン・ストラトス！目標を狙い撃つ！」

刹那「刹那・F・セイエイ！ダブルオー！目標を駆逐する！！」

——世界の新たな戦いの火蓋が、この街で切つて落とされた。

第2話　　〈邂逅〉

ロックオン「刹那、街に入り込んだ機体は結構な数だぞ。避難も全然出来てねえ……」
刹那「無差別破壊が目的なら、早急に機体を破壊する。」

ロックオン・ストラトス、刹那・F・セイエイ。2人のガンダムのパイロットは街に侵入した敵機を次々と撃破して行く。

刹那の機体、ダブルオーガンダムは2基のGNドライブを搭載した高出力の近接戦闘用の機体だ。腰にマウントされたGNソードIIを手にし、ビームサーベルではなく実体剣のそれらを振るい敵機を無力化して行く。

ロックオンの駆るケルデムガンダムはGNスナイパーライフルIIを用い上空から敵機を狙撃、だがこれも地表には多大な被害が出てしまう。避けられない犠牲と言うべきか。

市民への被害は避け、極力建物も破壊しない様に戦闘する2機のガンダムだが、無差別破壊をするテロ組織の機体を鎮圧するのには時間が掛かりそうで…

その頃、カミーユ達とはいえば、ガンダムの戦いを見ながらも市民の避難を手伝い、誘導していた。市民の避難誘導をするのは警察や街の警備h I Eがしており、カミーユ達はその手が回らない所を、といった具合だ。

ジウドー「カミーユさん…！あれってもしかして…!？」

カミーユ「ああ、そうだ。ソレスタルビーイングだ…！」

ミコツト「ソレスタル…?」

ソレスタルビーイング、その名を聞くとタクヤが目を輝かせる。

タクヤ「そ、ソレスタルビーイング!?それってあの、数年前世界に対して武力介入を行って…:武力による戦争根絶を掲げて戦ったっていう…!」

ルー「言ってる事はそうだけど、そんなに綺麗な物じゃないわよ…彼等にとって立場は関係ない。そこで争いをしている者に対して武力介入を行うの。」

バナージ「でも、ソレスタルビーイングって数年前に人革連やユニオンが結託した国連軍と連邦軍の手によって壊滅したって…」

カミーユ「ああ、俺もそうだと思っていた。だがあのガンダムは……！」

緑色に輝くGN粒子を放出する2機のガンダムは間違いなくソレスタルビーイングの物だ。カミーユは間違いないと思いつつもどこか様子を探っている様で。

ファ「カミーユ、どうしたの？ 私達は私達に出来る事を……！」

カミーユ「彼等は想定外の勢力なんだ、そろそろ……」

カミーユがそう言うと、『そのとーりー！』という声が辺りに響き……M9、ASの最新軍用モデルの機体が現れる。もう片方はM9よりも若干装飾が多いデザインの機体、ARX-7アーバレストという機体で。

ミコツト「あ、あれって……」

タクヤ「M9!? っていうかあの隣の機体……!?!」

カミーユ「来てくれたか……ミスリル!」

カミーユがその名を呼ぶと、ジユドーヤルーが驚嘆の声を上げ、一方でASを駆る2

人は戦闘を開始する。

クルツ「おうよ！待たせたなカミーユ！グリプス戦役のやラプラス争乱の借りはここで返すぜ！」

宗介「無駄口を叩いている暇は無いぞウルズ6、一気に片付ける…！」

クルツ・ウエーバーと相良宗介も戦線に加わる事で、テロリストの操る機体達は次々と沈静化されていく。

また一方で、何かを探し回る様な動きをしていた地上の部隊もミスリルの戦闘員の登場により徐々に鎮圧されていって……………

クルツ「よおスナイパー…！随分ゴキゲンな機体を乗り回してるじゃないか。」

ロツクオン「あんたこそ、ASで狙撃戦なんてやる気あるじゃないか。」

刹那「はあああつ!!」

素早くモビルスーツを切り刻んで行くダブルオーの脇で、ASの俊敏さを活かし、爆

発物や大量の火薬を積んだ装備をしている機体を破壊して行くアーバレスト。

ダブルオーの動きを見て頭に引つ掛かる物を感じるアーバレストのパイロットは、アーバレストに搭載されたAIに尋ねる。

宗介「あの操縦に近接戦闘スキル……エクシアのパイロットだな？」

アル『行動パターンや装備の傾向からエクシア、デユナメスのコンセプトを元にして
いる事が推測されます』

宗介「ソレスタルビーイング……再び姿を現したと聞いてはいたが……」

アル『軍曹、後方に敵機です』

アルの警告を聞けばすぐさま単分子カッターを取り出し振り向き様に投げ付ける。
アーバレストの背後から忍び寄る敵機のコクピットに直撃し、機体は活動を停止する。

宗介「まずはここを切り抜ける。彼等との接触もしなければならんからな。」

アル『イエス、サージエント。』

程なくして戦闘は終了、2機のガンダムとA.S.、そしてミスリルの陸戦部隊の活躍により街の被害は最小限に留められた。

まだ街の騒ぎが収束していない内に、狙撃用のM9を駆るクルツはガンダムのパイロットに接触を図る。

クルツ「そちらのモバイルスーツのパイロット、聞こえてるか？」

ロックオン「ああ、聞こえてるぜ。裏社会の天下のミスリル様が何の用だい？」

クルツ「なあに大した事じゃないさ、というか、分かってんだろ？」

刹那「概ねの話は聞いている。協力に感謝する。」

宗介「積もる話もあるが……まずは彼等と合流するぞ。」

ロックオン「と……そうだな。伝説のガンダムパイロット様を拝みに行くとしますか。」

ミスリルの2人の案内で、機体を安全な場所へと移し……陸戦部隊として戦闘を指揮していたベルファンガン・クルーゾー、メリッサ・マオと合流すれば、彼等はカミーユ達の元へと向かった。

カミーユとルーを中心に、戦闘によって荒れた公園で固まる一行はカミーユ達に疑問をぶつけていた。

ジュード「カミーユさん、あいつらの事知ってるんだろ。」

カミーユ「知っている……と言うほどではないさ。」

タクヤ「モビルスーツを降ろしてもらう事はないとか……カミーユさんマジでどこまで知ってたんですか？」

バナージ「タクヤ、落ち着きなよ……。それより、これから会う人達って……。」

バナージがそう言いかけた所で、クルーゾーを先頭にしてミスリルの4人とソレスタルビーイングの2人が公園の入り口に現れて。その姿を見たカミーユが声を上げる。

カミーユ「刹那……！刹那・F・セイエイなのか……!？」

刹那「久しぶりだな、カミーユ・ピダン。」

カミーユ「本当だよ、それでそっちは……。」

ロックオン「つと、余計な説明は省かせてもらうが…俺は2代目。デユナメスのパイロットとは全くのべつもんだ。」

どうやらガンダムのパイロットとは面識があるらしいカミーユを見て唾然とするジュードー達にクルーゾーが声をかける。

クルーゾー「こんな形で会いたくはなかったが、初めましてだな。 Rond・ベルの諸君。」

ルー「初めまして。話はブライト艦長から聞いていました。迅速な対応ありがとうございます。」

マオ「その様子…本当に伝えられてなかったみたいだね、あんた達。」

マオの言葉でようやく合点の行ったジュードーとタクヤはカミーユにずしずしと歩み寄って行き…

ジュードー「ほら、カミーユさん!!ちゃんと全部話してもらおうよ!」

タクヤ「そうですね! バナージの休養の為に地球に降りたつての…:俺達下手した

ら死んでたんですからね!」

カミーユ「わ、分かった!ちゃんと説明する!今回の作戦も…バナージの事も…今後についても…!」

ジウドー達に揺らされてもみくちやにされながらそう言えば解放され。マオがコホンと咳払いをし…

マオ「ま…積もる話があつちでしょう。ガンダムやASも片付けなきゃいけないしね。」

ルー「ええ、案内をお願いします。」

バナージ「……………」

宗介「お前がユニコーンのパイロットか。」

バナージ「え?ああ…そうですね、あなたは?」

宗介「俺はウルズ7…いや、相良宗介だ。今はアーバレストのパイロットをしている。」

バナージ「バナージ・リンクスです。ユニコーンの…」

宗介「ガンダムのパイロットか。」

バナージ「……………そうです。」

宗介「事情はブライト大佐から聞いている……………お前はお前の役目を果たした。だが、今お前は連邦軍の側には置けない。…地上にいる間、お前の身はミスリルで預かる事になっっている。」

バナージ「……………」

宗介「……………」

クルツ「悪いなあ少年。こいつこれでも昔に比べたら話すの上手くなってるんだよ。」
クルーゾー「連邦軍は君とユニコーンを拘束したがっている。…ブライト大佐とオットー中佐はユニコーンは差し出したが、君を行方不明扱いとして匿いたかった様だ。」
マオ「君みたいな少年を何時間何十時間と尋問するのは、気が引けたんだろうね。」

気まずく空気が流れる中、2人の間にクルツが割って入り、クルーゾー達も説明に入る。

バナージ「…分かってます、俺がした事とはんでもない事だったって。」

ミコツト「…バナージ…」

宗介「……」

マオ「……それで、カミーユ・ビダン君。君達は協力してくれるのかしら？」

カミーユ「勿論ですよ、バナージだけでなく僕らも世話になるんですから。」

フア「えっ？」

タクヤ「マジですか……？」

カミーユ「恐らくタクヤ達も、バナージの友人となればそう簡単には解放されなかつただろう。ゼータやダブルゼータも、正直連邦軍は隔離したがっているはずだ。」

ジユドー「……あ、降ろす必要がないってもしかして……？」

ジユドーが何かを察すれば、ロックオンが頷いてみせる。

ロックオン「ああ、あんた達のガンダムはうちの船に積み込んである。」

刹那「ゼータ、ダブルゼータ、リ・ガズイ、メタス……そして、——ガンダムだ。」

カミーユ「……ああ。」

ジユドー「……」

そのガンダムの名を聞いた途端カミーユ達の表情が曇る。

マオ「……………さ！もうそろそろ合流ポイントだ。この街には色々厄介なのがいるから……ジャマーが働いてる内に乗り込むよ。」

しばらく歩いて着いた場所は誰もいなくなった港。何も無いじゃないかと辺りを見回すジユドー達の前に、巨大な水柱を上げながら2隻の船が浮上してきて……

タクヤ「す……………すげえええ!!!」

片方は水色と白のボディの、如何にも高速巡洋艦といった風貌の戦艦。

もう片方は流線型のボディをした潜水艦、その名もトウアハー・デ・ダナン。それらを目にした一行は声を上げざるをえなかった。

クルーゾー「こちらが我々ミスリルの母艦……トウアハー・デ・ダナンだ。」

ロツクオン「そしてこつちが、俺達ソレスタルビーイングの母艦、プトレマイオス2
さい。」

どちらも戦闘用の艇である事はその風貌から明らかだ。連邦軍の戦艦とは全く違った技術が使われているのが見て分かるようでタクヤは興奮を隠せずにいて。

ロックオン「さて……………どうやらそちらの艦長もトレミーにお越しの様だし、話はこつちですか。」

刹那「搬入したモビルスーツや装備の確認も行わなくてはならない。」

宗介「こちらのASは？」

クルーゾー「回収済だ。」

マオ「ようし、それじゃあ……………ひとまずここを離れるとしますか！」

マオの指示で、プロレマイオス2に乗り込んでいく一行。

バナージは最後に、煙の上がる街を見てこう呟いた。

バナージ「……………機械にも、心って宿るのかな……………」

ジユドー「ぼーっとしてるなよバナージ！置いてかれちゃうぞ！」
バナージ「は、はい！今行きます！」

ガンダムを駆る少年達、彼等は再び戦いに身を投じることとなる……………。